

<p>8月28日 (日) 創世記 35章</p>	<p>「さあ…ベテルに上ろう。わたしはその地に苦難の時わたしに答え、旅の間わたしと共にいてくださった神のために祭壇を造る」(3節)。ベテルは、ヤコブが兄エサウから逃げて荒れ野で野宿した夜、「あなたがどこへ行こうとも守り、必ずこの地に連れ帰る」と主が約束された場所。苦難を通してこそ見えてくる主の慈しみと真実がある。この主を共に賛美していこう。</p>
<p>29日 (月) 創世記 36章</p>	<p>「エサウ、すなわちエドムの系図は次のとおりである。エサウは、カナンの娘たちの中から妻を迎えた」(1-2節)。なぜ神はエサウを退けヤコブを選ばれたのか。人間的好感度ではエサウが勝りそうだが神の選びに好感度は関係ない。神は「ずる賢いヤコブ」を通してご自身の働きを示された。神の選びはヤコブを称えるためでなく、神の栄光をあらわす選びなのだ。</p>
<p>30日 (火) 創世記 37章</p>	<p>「兄たちは夢とその言葉のために、ヨセフをますます憎んだ」(8節)。父の寵愛を受け、他人の気持ち分からないお坊ちゃんとして育ったヨセフ。神は兄たちの憎しみを用いてヨセフに過酷な試練を与え、「神の器」として訓練していく。ヨセフに与えられた夢を解く才能は、それだけでは何の役にも立たない。神の訓練を受けて、はじめて神の働きに用いられていく。</p>
<p>31日 (水) 創世記 38章</p>	<p>「ユダは調べて言った。『わたしよりも彼女の方が正しい』」(26節)。当時の結婚制度において、ユダは一家の長として、夫を亡くした嫁タマルの生活を守る義務があったが、それを怠った。タマルの行動は理解しにくい面があるけれど、女性の生きる権利を求めての行動であり、キリストの系図(マタイ1章)にタマルの存在が確かに刻まれていることを覚えていたい。</p>

聖書日課 『からし種』 2022.8.28-9.4

<p>9月1日 (木)</p> <p>創世記 39章</p>	<p>「しかし、主がヨセフと共におられ、恵みを施し、監守長の目にかなうように導かれた」(21節)。神の持ち運びの中で、ヨセフは奴隷としての理不尽な扱いを繰り返し受けることになる。が、権力と金をもった人間の身勝手に理不尽な行動に挫けることなく、見えない神への信頼を深め、確信をもって堂々と行動していくヨセフの信仰に教えられる。</p>
<p>2日 (金)</p> <p>創世記 40章</p>	<p>「(ヨセフは)牢獄に自分と一緒に入れられている…役人に尋ねた。『今日は、どうしてそんなに憂うつな顔をしているのですか』」(7節)。理不尽な扱いに心が折れても仕方がない状況で、ヨセフは弱っている人に寄り添い、優しく声をかけていく。「共に歩んでおられる主」がヨセフの心に生きてくださっていたのだろう。その主を心に迎え入れて歩む一日となるように。</p>
<p>3日 (土)</p> <p>創世記 41章</p>	<p>「ヨセフはファラオに答えた。『わたしではありません。神がファラオの幸いについて告げられるのです』」(16節)。ヨセフはファラオを前に語る機会を与えられる。心が舞い上がってもおかしくない状況でも、ヨセフは冷静に落ち着いて神から示された言葉を語る自らの役割に徹していく。自分にスポットライトを当てるのではなく、ただ神に栄光を帰す歩みができるように。</p>
<p>4日 (日)</p> <p>創世記 42章</p>	<p>「互いに言った。『ああ、我々は弟のことで罰を受けているのだ…』」(21節)。「罰」かどうかは、人の知るところではないが、兄たちもかつてヨセフを残酷に扱ったことを彼らなりに罪と感じ、ずっと心を重くしていたのだろう。この告白がヨセフを感動させる。人は罪を犯す者となったけれども、神がその前にくださっていた善い心はきっと失われていない。</p>